

## 北海道厚岸産の特大マガキについて

久保田 信

On a giant oyster from Akkeshi, Hokkaido, Japan

Shin Kubota

北海道の道東に位置する厚岸には厚岸湾奥に厚岸湖があり、そこには古くから巨大なマガキ *Crassostrea gigas* が生息することが知られている。厚岸には、例えば優に体長20cmほどにも達するオオバンヒザラガイ *Cryptochiton stelleri* などの巨大な軟体動物の仲間が幾種も産するが、今回はナガガキの異名をもつマガキについての1記録である。

古い話になるが、著者が北海道大学大学院生となった1970年代の後半に、2週間実施された系統分類学(動物学専攻)の臨海実習に参加した折、厚岸湖でドレッジをする日もあり、そこでの採取物中に本報告で紹介する巨大なマガキが幾つも採れた。勿論、生体も多数見られたが、ここで紹介する本個体が最大であった。それは残念ながら死亡個体で、片側の貝殻しかなかったが、この約40年間この一個体だけはずっと大事に保管し続けている。化石あるいは半化石ではないだろうこの貝殻は、殻長41.4cmで、先端の最大幅が8.4cmもあって、特大だった(図1)。コンボウ型伸長戦略のカキ殻(鎮西, 1997)ではない(図2)。異名ナガガキの通りで、たいへん細長い。当時、干潮時に実習でカキ島へも上陸したが、ドレッジで採れるような巨大なものではなかったが、やはり大きかった。その折りに厚岸町で開催されていたあやめ祭で、カキ島サイズの“焼きガキ”も味わえた。また、むき身にして実験所でカキフライにして食してもらおうと、やはり一口ではほおばれない大きさだった。

この特有特産特大マガキはかつて著しくバイオマスが減少したことがあったと耳にしたことがある。それは厚岸湖に流入する河川の上流の森を切り開いたことで、雨水が一気に海に流失するのと、海の水温低下(25℃以下)を招いてカキの繁殖ができなくなるというのが原因だったとのことである。このことは、犬養哲夫北海道大学名誉教授の著書にそう書いてあって、当時、興味深く読んだ(犬飼, 1970)。厚岸のパイロット・フォーレストづくりに倣ったのかもしれないが、今では漁師が山に植林して漁場を守り、よりよい漁獲を確保する話がよく知られるようになり(畠山, 1994)、日本各地でも同様の植林運動が実践され、いわゆる森川里海の連環が強く意識されている。

犬飼(1970)によると、厚岸では宮城県から種ガキを取り寄せて、1937年には復活以上の好成績だったとある。その頃からの御利益に小生は院生時に授かったのであろうか? 厚岸湖にいた目を見張るナガガキ(犬飼, 1970, p.293の挿図を見よ)は、その後、なぜかもう存在しなくなったらしい? 再復活は難しいのだろうか??



図1・2. 北海道・厚岸湖の巨大なマガキ *Crassostrea gigas* の貝殻の両面.  
(著者の足の長さ: 25cm).

## 謝 辞

厚岸での臨海実習を当時ご指導頂いた北海道大学山田真弓・伊藤立則先生はじめ厚岸臨海実験所職員の皆様方に今更ながら深謝致します。

## 引用文献

鎮西清高 1997: カキの生活と進化. 自然科学のとびら, 3(4): 27.

畠山重篤 1994: 森は海の恋人, 北斗出版, 東京.

犬養哲夫 1970: カキ, pp.293-306. In: “わが動物記”, 暮らしの手帖社, 東京.